
武装従者とお嬢様

ドット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装従者とお嬢様

【Nコード】

N1582BA

【作者名】

ドット

【あらすじ】

とあるお嬢様の下へ、一人の従者がやってきた。ところが、その従者は元軍人！？ その経歴に怯えるお嬢様だったが、彼女の前に現れたのはちよつとおどおどしたイケメン。なんだ普通じゃないかと安心したお嬢様であったが……！？

はじめて書く作品です。

未熟な点などが多々存在するかと思いますので、あらかじめご

了承のうえでお読みください。

また、登場する人物や地名、製品名等は実物のものと一切関係ありません。

第1話 挨拶

冷たい風が静かに流れる冬の夜明け頃。

徐々に空が白みを帯びはじめていくなか、私、セイラ・ベルクートは静かに「その時」を待っていた。

「あと五分……」

今日、一人の従者がやってくる。しかも、私専属の。

名前はタカト・シノノギ。男性。年齢は23歳。独身。

彼は元軍人で、5年の軍歴を持つ三等軍曹さん。まあ、元だけど。

基礎訓練ののち、歩兵連隊に配属され、2年ものあいだ国境の防衛を務めたそう。

途中、その能力を認められて特殊部隊に転属、その後はいくつもの任務で多くの成果を収めてきたらしい。勲章も何個か貰ってるとかで、一週間前に軍を辞めさせられたそうです。

……軍人で、見るかぎり輝かしい功績を持っているんですよ。エリートじゃないですか。

なんで 軍を辞めさせられた!?

なんで!?! この人なんかやったの!?! 問題児なんですか!?! 不良ですか!?! 汚い花火だぜ!?! ヒャッハー汚物は消毒だ!?!? 怖い。めちゃくちゃ怖いです。ほっぺとかごついキズ痕ありそうだな。目とか荒んでそうだな。体格もゴリラみたいな感じかな。「趣味は人を撃つことです」とか言われたらどうしょ。

とまあ、彼が従者として来ることが決まってから私はまともに寝て

いない。てか、寝れない。

なんで私の親はこんな人を雇った！？ 嫌がらせ？ こないだ父に「キモい」とか言ったアレのせい？

コンコン。

・・・。

来た。来たよ。

うわああああ！！どうしようどうしよう！！え？本当にどうしたらいいの！？返事したらいいのかな？いや、さっきのノックは起きてるかどうかの確認だから返事なしでも大丈夫か。

とりあえず、音を立てずに毛布に包まって寝たふりをする。

心臓の鼓動が早くなる。心音って他の人間には聞こえないよね？

ガチャリ。

入ってきた！入ってきたぞ！！

足音でわかる。近づいてきてる！

バレないよね、寝たふり。

コツコツコツ、と聞こえていた足音が止まった。

足音からして、ベッドから少し離れた窓側の辺りに「彼」がいる。

シャツ、シャツ、とカーテンを開ける音が聞こえた。

そして、ついに来た。

「お嬢様」

耳に届いたのは、想像していたよりもさわやかな声だった。

もつと野太い声が来ると思っていたんだけどな。まあ、23歳だしこんな感じでもおかしくはないか。

ゆっくりと、目を開ける。

視界に飛び込んだできたのは、真っ黒なスーツ。

・・・あれ？ スラツとしてる。ゴリマツチヨじゃない？

ゆっくりと、視線を上へシフトする。

傷一つない頬。

大きな、サファイア色の瞳。

漆を塗ったかのような、艶やかな黒髪。髪型はショートなウルフヘア？

「おはようございます」

差し込んでくる日の光を背に受けながら、タカト・シノノギは立っていた。

「お、おはよう・・・ございます・・・」

「はじめまして、タカト・シノノギと申します。本日より、セイラ・ベルクート様の従者を務めさせていただきますことになりました」

「あ、えと、セイラです・・・よろしくです・・・」

「よろしく願います。御用の際は何なりとお申し付けくださいませ」

なんだこれ。

私のイメージしたタカト・シノノギじゃないんですけど。

いや、なんというか、その・・・。

軍人ぽさが微塵もないんですけど。

爽やかなんですけど。

てか、イケメン過ぎるんですけど。

神様、ごめんなさい。

シノノギ様、申し訳ございませんでした。

経歴だけで貴方を、いえ、貴方様をおぞましい殺戮者だと決めつけてしまった私をお許しください。

心の中でそう懺悔し、改めて彼を見る。

ああ、夢じゃないよ。現実だよ。

よかった……っ！

「あの、お嬢様」

「なんででしょうか？ というか、セイラでいいですよ」

「えっ！？ え、えと……」

困ってる！ 困っていらっしやる！！

挙動不審になってるよ！！見てるだけで申し訳ない気持ちになっってきたんですけどー！！

「セ、セイラ様……で、よろしいでしょうか？」

「あ、はい。あんまり堅苦しいのは苦手なんで、もっと砕けた感じで接してくれて良いですよ？ なんていうか、友達に話しかけるみたいなの」

「そ、それはあまりにも失礼が過ぎます！」

……無理やり押し付けるのはダメか。

そもそも彼は「従者」としてここにやってきた。まあ、フットマンのような存在だ。食事の給仕、ドアの開閉、重量物の運搬といった

仕事をこなすのが彼の役目。元軍人だということだから、警備や警護とかもしてくれるかも。（見た目からして軍人には見えないんだけども）

要するに、彼は私に仕えるためにここに来てくれたんだ。

そんな彼に、いきなり「名前と呼べ」とか「砕けた感じで良い」なんてことを言い、あまつさえそれを強要させるなんていうのは、従者である彼にとって迷惑だろう。私が彼の立場だったら迷惑だと感じるもん。

申し訳ないこと言っちゃったな。と思い、謝ることにした。

「困らせるようなこと言ってごめんなさい。やっぱりシノノギさんがやりやすいようにしてください」

「はっ、かしこまりました。なるべくセイラ様のご意向に沿えるよう努力いたします。あの、お気遣いありがとうございました」

「いえ、そんな……」

「私のことは「タカト」と呼び捨てでお願いします。「さん」を付けて呼ばれるような身分ではないので。それに、できれば敬語も……」

えっっ！！！！

年上の男性を呼び捨てですって!?!?

いやいや、難易度高すぎるでしょ!!!

「いや……その、年上の方を呼び捨てというのはちょっと……」

「呼び捨てで呼んでいただけないのでしたら、自分もセイラ様のことを「お嬢様」と呼ばさせていただきます」

そう言っただけでイタズラっぽく笑みを浮かべるシノノギさん。その笑み

は反則的でしょ。

どうしょ。呼び捨ても気が引けるが、お嬢様呼ばわりされるのはすごい嫌だ。

私そういう柄じゃないんだよね。

「じゃあ・・・タカト、さん。で、いいかな？ これ以上はムリ」

「はい、ありがとうございます」

ふわりと微笑むタカトさん。

この人ぜったい元軍人じゃないよ。めちゃくちや接しやすいいんですけど。同級生だったらすぐに友達になれるよ。すぐに友達100人つくれるよ。

「もうすぐ朝食のお時間です。お着替えください」

「はい」

「では、部屋の外でお待ちしていますので、お着替えが終わりましたら呼んでください」

そう言っで一礼をすると、彼は後ろを向いて部屋のドアへと向かった。

その時、私ははじめて彼の腰の方に視線がいった。

「い、っ!?!」

会話をしているとき、私はずっと彼の顔を見ていた。いや、会話の時は相手の顔を見るのは一般常識ですし、そうしないと失礼だし。だから、腰から大腿部へかけての「ソレ」に気付かなかったのは私のせいではない、はず。

鈍く輝く鋼鉄の凶器が収まった入れ物が、彼の腰にぶら下がって

た。しかも左右に。

「どうか、なさいましたか？」

「あの・・・それって何ですか？」

「「M93R」という拳銃でございます」

笑顔でそう答えると、彼は「失礼します」と言って部屋を出た。

・・・。。。

・・・。

・・・拳銃だと？

やっぱり・・・やっぱりこの人こわいよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1582ba/>

武装従者とお嬢様

2012年1月4日00時52分発行